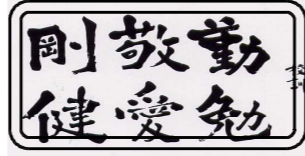


# 御陵の風



文責:校長 藤井浩彦

## ◆「学校訪問」でたくさん褒めていただきました！

先月末、大野城市教育委員会の方々の「学校訪問」がありました。その中で1・2時間目の授業を参観していただきました。終了後、委員会の方からのご意見やご感想をいただく場面では「生徒さんの姿が大変素晴らしかったです」「どのクラスの雰囲気もよく、共感的な人間関係が伝わってきました」「生徒一人一人の表情が素晴らしい。素直でまじめで前向きで、感心しました」「生徒さんと先生との信頼関係ができていますね。授業中のやりとりを見ながら本当に微笑ましく感じました」「生徒同士で交流する場面でも、とても自然にそして積極的に話し合いができていて、日頃から授業にしっかり取り組まれているからだと感じました」「本年度、大野城市内の小中学校にいくつか行かせていただいておりますが、御陵中の生徒さんの姿が一番素晴らしかったです」…などと多くのお褒めの言葉をいただきました。

私は、御陵中の子ども達をこれだけ褒めてくださったこと、そしていつも全力で取り組んでいる先生方を評価してくださったことを、本当にうれしくまた、誇らしく思いました。今後より一層、学校・家庭・地域の連携を強化し、さらに素敵な御陵中学校になっていくよう頑張りたいと思います。

## ◆1年生が「ふるさと学習」に行ってきました！

11月7日、1年生が「郷土の歴史や史跡を調査・資料収集することで、ふるさとのよさを理解し、郷土を愛し誇りに思う態度を養う」ために「ふるさと学習」に行きました。

当日は、「大野城跡」「水城跡」「大宰府政庁跡」「大野城心のふるさと館」等の見学及び説明を受けました。子ども達は、とても熱心な態度で係の方の説明を聞き、懸命にメモをとっていました。子ども達の感想をいくつか紹介します。



【真剣に説明を聞く1年生】

- 私たちのふるさとには古代からの歴史がたくさんあるということを改めて知ることができました。ふるさと学習では、私たちのふるさとのことをたくさん知れたので、今頭の中に残っている今日のことを、他の人にも伝えていきたいです。
- 私は初めて大野城跡を見ました。山奥にあることは全然知らなくて驚きました。お話を聞いて、知らないことだらけでした。日本で一番古かったり大きかったり、身近にこのような建物があることはとても貴重です。
- 私たちが住んでいる家の近くにあんなにすごいものがある、とてもびっくりしました。昔の人は自分の手であんなに大きくて今も残っているようなすごいものを作って…とてもすごいなと思いました。

今住んでいる歴史ある「大野城」の素晴らしさを再認識した子ども達でした！

## ◆新生徒会発足へ向けて



【朝の選挙運動の様子】

そして、立会演説会の話をしっかり聞き、すべての子ども達が「他人事」ではなく「自分事」としてとらえ、選挙に臨んでくれることを願っています。

11月22日(金)は、新生徒会役員を決めるための立会演説会及び選挙となります。会長候補、副会長候補、書記候補、会計候補に合計14名の生徒が立候補しました。まずは、立候補した生徒の勇気とやる気に敬意を表したいと思います。現在、選挙運動が活発に行われているところです。

以前の学校便りに「利他の心」について載せましたが、まさに立候補した皆さんは、この「利他の心」をしっかりと持ち合わせているのだと思います。学校のため、学年のため、何より御陵中一人一人のために役に立ちたい、活躍したいと立候補したのだと思います。候補者の朝・帰りの選挙運動やテレビ演説

## 『自分がやらなくて誰がやる』

学校の詩 ⑥

先月、日本人初の国連難民高等弁務官として活躍された緒方貞子さんが亡くなりました。緒方さんは1927年東京都に生まれ、幼少期をアメリカ、中国、香港などで過ごされています。聖心女子大学卒業後アメリカに留学し、ジョージタウン大学で国際関係論修士号を、カリフォルニア大学バークレー校で政治学博士号を取得。その後、1974年に国際キリスト教大学准教授、1980年に上智大学教授に就任。1976年には日本人女性として初の国連公使となり、その後1991年には日本人として、また女性として初の国連難民高等弁務官に就任されました。就任直後、湾岸戦争が勃発し、そのことにより数十万人のクルド人がトルコ政府に受け入れを拒否され、国境地帯にとどまることになりました。当時、このような状況の中で避難民を保護することは、緒方さん達の任務ではありませんでした。しかし緒方さんは、人道的見地から、何より人命を守るために彼らを保護し支援することを決断したのです。そしてこの時、緒方さんはそれまでの難民保護の考え方を超え、新しい支援の枠組みを作り出したのです。このあとも緒方さんは「人命を救うための最善の選択」という基準の下、危険な現場にもたくさん足を運び、多くの人々を救ってこられたのです。

エッセイストの小島慶子さんが、緒方さんを訪ねる機会があったとき、「世界から戦争をなくすことができると思いますか？」と聞いたそうです。すると、緒方さんはこう言われたそうです。「残念ながら、世界から戦争がなくなることはないでしょう。でも、戦争をなくすことができる本気で信じる人にしか世界を変えることはできません」

小島さんは、そのときの心境をこう語っています。  
「私は目の前がパッと開けたような思いでした。本当にその通りです。どうせ戦争はなくならないと思っている人には何も変えられない。命がけて人助けをすることも、紛争の当事者に根気強く働きかけて平和を実現することもできないでしょう。・・・(中略)・・・」

でも、世界各地で危険に身をさらし汗を流しながら、今も本気で平和な世界をつくらうと頑張っている人たちがいます。それができなくても、身近な平和を大切にする人たちの小さな力が集まって、世界は少しずつ変わっていく。そのことを、緒方さんの言葉は教えてくれます。現実はいかに厳しいけれど、私たちは決して無力ではないのです。

11月7日に行われた3年生進路説明会の中で、私は2つの話をしました。

一つ目は、13歳のときスキージャンプ世界大会で初優勝、ワールドカップ歴代最多の53勝を挙げている高梨沙羅さんの話です。彼女は中学3年生のとき、世界で活躍できる選手になるには、英語が必要になるということで、一般の高校には行かずインターナショナルスクールに進学しました。そして、インターナショナルスクールに入学して、たった4ヶ月で、高等学校卒業程度認定試験(大検)に合格しました。つまり、4ヶ月で高校3年間の勉強をしたのです。高梨さんは一日11時間、勉強していたという話です。ちなみに、彼女は17歳の時、飛び級で、日本体育大学に入学しました。

もう一つは、私が教えたある卒業生の話です。彼女は中学3年生のときに、「親にはお金の面でできるだけ負担をかけたくないから」と塾には行かず、授業と家庭学習を誰よりも大切に、ひたすら地道な努力を続け、とても難しいと思われた志望校へ合格した話でした。

二人に共通することは、夢や目標を持ち、諦めず粘り強く努力することがいかに大切であるか。そしてその努力によって、道は切り開かれていくということです。

もう一つ思い出す言葉があります。

法医学者の古畑種基さん[1891-1975]がモットーとされていた以下の言葉です。

今すぐやりなさい	(今やらなくていつやる)
自分自身でやりなさい	(自分がやらなくて誰がやる)
最善を尽くしなさい	(中途半端で何が出来る)

言葉通り解釈すれば、「今日できることは明日に延ばさず、今すぐやりなさい。自分でやるべきことは人に頼らず自分でやりなさい。いい加減なことはせず、最善を尽くしてやり遂げなさい」ということとなります。( )の中の言葉は対句となっています。それを自分自身に問いかけてみてはどうでしょうか。

「今やらなくていつやる?」「自分がやらなくて誰がやる?」「中途半端で何が出来る?」

今日、ここに載せた人は皆、本気で未来像を描き、様々な困難を乗り越え、自らが本気で努力し取り組んだ人たちばかりだと思います。「明日でもいいかな・・・」「誰かがやってくれるといいな・・・」「これぐらいでもいいか・・・」とつい思ってしまう自分自身を、反省する私です。

【校長：藤井浩彦】

